2019 年９月１日（日）「裏切りと恵み」

マタイ 26:14-25

14 そのとき、十二弟子のひとりで、イスカリオテ・ユダという者が、祭司長たちのところへ行って、 15 こう言った。「彼をあなたがたに売るとしたら、いったいいくらくれますか。」すると、彼らは銀貨三十枚を彼に支払った。 16 そのときから、彼はイエスを引き渡す機会をねらっていた。

17 さて、種なしパンの祝いの第一日に、弟子たちがイエスのところに来て言った。「過越の食事をなさるのに、私たちはどこで用意をしましょうか。」 18 イエスは言われた。「都に入って、これこれの人のところに行って、『先生が「わたしの時が近づいた。わたしの弟子たちといっしょに、あなたのところで過越を守ろう」と言っておられる』と言いなさい。」 19 そこで、弟子たちはイエスに言いつけられたとおりにして、過越の食事の用意をした。

20 さて、夕方になって、イエスは十二弟子といっしょに食卓に着かれた。 21 みなが食事をしているとき、イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちひとりが、わたしを裏切ります。」 22 すると、弟子たちは非常に悲しんで、「主よ。まさか私のことではないでしょう」とかわるがわるイエスに言った。 23 イエスは答えて言われた。「わたしといっしょに鉢に手を浸した者が、わたしを裏切るのです。 24 確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はわざわいです。そういう人は生まれなかったほうがよかったのです。」 25 すると、イエスを裏切ろうとしていたユダが答えて言った。「先生。まさか私のことではないでしょう。」イエスは彼に、「いや、そうだ」と言われた。

【序論】

「最後の晩餐」は、イエス・キリストの受難物語の重要な位置を占めています。多くの画家が「最後の晩餐」の聖画を残しておりますが、やはりレオナルド・ダ・ビンチの作品は際立っているでしょう。少し絵を拡大させると、主イエスの左にいる髪の長い若者がヨハネ、体を乗り出しているのがペテロ（右手にナイフを持っていて「あなたを裏切ろうなんて奴は私が殺ってやりましょう」という勢いを感じさせる）、そして（裏切りを指摘されたからでしょう）身を引いているのがイスカリオテのユダだと言われます。ただ、今日の箇所では、「あなたがたのうちの一人がわたしを裏切る」と主が言われたとき、弟子たちが口々に「**主よ。まさか私のことではないでしょう**」と不安を吐露しているのです。弟子たちの献身の不確かさが露呈されている。この後、自分が主の受難に直面

した時どう行動してしまうか、誰にも確信がもてなかった。しかし、ユダと他の弟子たちは同じ環境に置かれ、同じ言葉を語りながらも、決定的な違いがあります。それは、意志をもって主を裏切ったかどうかです。ユダという人物を見てまいりましょう。

【本論】

本論１．裏切りの動機

> **そのとき、十二弟子のひとりで、イスカリオテ・ユダという者が、祭司長たちのところへ行って、こう言った。「彼をあなたがたに売るとしたら、いったいいくらくれますか。」すると、彼らは銀貨三十枚を彼に支払った。そのときから、彼はイエスを引き渡す機会をねらっていた。**（26:14-16）

イスカリオテのユダは、主イエスを裏切った人物ということで、歴史に名を残してしまいました。とはいえ、新約聖書では今日の箇所に至るまで、ほとんど登場してこなかったのです。敢えて言うならば、10 章で十二弟子の名前の一覧が出てきたときに、その一人として挙げられていただけです（10:4）。しかし、そこには既に「**イエスを裏切った**」という不名誉な説明が加えられていました。「イスカリオテ」というのは、恐らく「カリオテの人」という意味であり（「イーシュ・ケリヨート」というヘブライ語をギリシャ語に音訳したもの）、十二弟子の中にもう一人「ヤコブの子ユダ」という人物がおりましたから、その人と区別するために説明書きが必要だったのでしょう。この地は、ヨシュア 5:25 に出てくる「ケリオテ・ヘヅロン」のことで、南ユダヤ地方に位置しました。つまり、彼は十二弟子の中では稀な都会人であり、他のガリラヤの田舎者とは一線を画した人物だったのです（どこか疎外感を感じていたか）。能力的にも、取税人マタイを差し置いて会計係になるほど、真面目で信頼の置ける人だったのでしょう。

彼は他の弟子たちと同様、３年間主イエスと寝食を共にしてきました。二人一組の伝道旅行にも行き、主イエスの権威によって悪霊を追い出し、あらゆる病を癒す経験もしたことでしょう（10:1）。更に、その伝道旅行には一切のお金を持参しなかった訳ですから、貧しく生きる道も心得ていたはずです。しかしながら、彼の心は何かをきっかけに主イエスから離れ始めました。福音書にはその動機が一切書かれておりませんので、読者は想像するほかないのですが、まず考えられることとして、彼が抱いていたメシヤ観と主イエスの実際のあり方との間にズレが生じ始めていたのかもしれません。彼は国を救う急進的な政治家を求めていたのではないか。貧しい者に手を差し伸べ、徹底的に弱者の味方になる王であってほしいと願っていた。ところが、先般の主イエスの態度は

どうか。高価なナルドの香油を注いだ女の行動を咎めるでもなく、無駄遣いをよしとする。そのときに真っ先に口を開いたのはユダであったとヨハネは語ります。

**ところが、弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしているイスカリオテ・ユダが言った。「なぜ、この香油を三百デナリに売って、貧しい人々に施さなかったのか。」しかしこう言ったのは、彼が貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼は盗人であって、金入れを預かっていたが、その中に収められたものを、いつも盗んでいたからである。**（ヨハネ 12:4-6）

福音書は後代のものになるほど情報が詳細かつ断定的になる傾向があります（マルコ→マタイ→ルカ→ヨハネ）。ここでは、ユダが金入れから自分のためにくすねていたという事実まで明らかにされる。このような行動がある時点で既に、彼は罪に支配されつつあったと言うことができるでしょう。彼の心は（一瞬にしてというより）徐々に主イエスから離れていったのです。そして、主イエスがこれから捕えられることが現実味を帯びてきた今、彼の裏切りは決意となったのでしょう。「このまま一緒にいれば俺の命も危ういではないか。殺されるメシヤなどあり得ないのだから、あの男はそもそもメシヤなどではなかったのだ」。ユダの決断は主イエスに対する無理解から来るものでした。

ユダは祭司長たちのところへ行き、イエスを引き渡すことを提案しました。その代価として「銀 30 枚」（120 デナリ／労働者の 120 日分の賃金に相当）が支払われたようですが、これは奴隷一人分の金額であり（出 21:32、ゼカリヤ 11:12）、主イエスが如何に安く扱われたかということを物語っています。

本論２．過越の準備

**さて、種なしパンの祝いの第一日に、弟子たちがイエスのところに来て言った。「過越の食事をなさるのに、私たちはどこで用意をしましょうか。」イエスは言われた。「都に入って、これこれの人のところに行って、『先生が「わたしの時が近づいた。わたしの弟子たちといっしょに、あなたのところで過越を守ろう」と言っておられる』と言いなさい。」そこで、弟子たちはイエスに言いつけられたとおりにして、過越の食事の用意をした。**（26:17-19）

過越の祭はユダヤの三大祭の一つで、多くの巡礼者がエルサレムに集まりました。主イエスはご自分の十字架の死のタイミングを、どうもそれに合わせようとしておられたようなのです。それは、ご自分の死を「過越の小羊」の死と同一化するため、ご自分が「過越の小羊」そのものになろうとしておられたのです。ヨハネ福音書では、最後の晩餐が行なわれた日が一日繰り上がっており、その翌日（ちょうど過越の小羊が屠られる時間）に主イエスが十字架につけられたとされています。

そもそも過越の祭というのは、かつてイスラエルがエジプトで囚われの身となり、430 年に及ぶ奴隷生活から解放されたことを記念する祭です。モーセを通して、神はエジプトに驚くべき御業を見せられた。毎度予告を伴う災いが次々に下り、エジプトの王はイスラエル人を解放するよう要求されました。

①ナイル川の水を血に変える（出 7:14-25）
②蛙を放つ（8:1-15）
③ぶよを放つ（8:16-19）
④虻を放つ（8:20-32）
⑤家畜に疫病を流行らせる（9:1-7）
⑥腫れ物を生じさせる（9:8-12）
⑦雹を降らせる（9:13-35）
⑧バッタを放つ（10:1-20）
⑨エジプトを暗闇で覆う（10:21-29）
⑩長子を皆殺しにする（11 章、12:29-33）

10 番目の災いのとき、神はイスラエル人に前もって家の門柱と鴨居に小羊の血を塗るようお命じになりました。審きが到来した時、神の使いは小羊の血を見て、その家を「通り過ぎる」と。血生臭い話ですが、小羊の血とは、神の怒りにふれないための犠牲を表しているのです。

ですから、過越の祭は、神の審きが自分たちの前を通り過ぎたことを記念する祭であり、エジプトからの解放を象徴する様々な食べ物をもって祝われたのです。

- 種入れぬパン…罪や穢れがないことを象徴
- 小羊のすねの骨…死の使いが通り過ぎたことを象徴
- 苦菜…エジプトでの苦しい生活や束縛を象徴
- ハロセット…エジプトの地でのレンガ作りを思い出させる果物で作ったもの
- 野菜類…紅海を渡ったときの様子を思い出させる

「**種なしパンの祝い**（徐酵祭）**の第一日**」というのは、ニサンの月（３～４月）の 14 日に当たり、この日からユダヤの家庭では家中のパン種（酵母）を除去する作業に入ります。これは何を意味するかというと、パン種（酵母）が「増殖する罪」を象徴するため、神の怒りにふれないためにそれを取り除くという、極めて宗教的色彩の濃い一種の儀式なのです。また、イスラエルがエジプトから脱出する際、急を要したため、種入りのパンを焼いている暇がなかったので、その緊急性を思い出すために「種入れぬパン」がこの時に食べられました。

過越の祭は、このように様々な準備が必要だったのですが、弟子たちから見て主イエ

スは特に何もその準備をしていないように映ったのでしょう。自分たちが準備をすると申し出ます。しかし、主イエスの側では既にその備えがあったようで、市内にいる、恐らく弟子の一人でしょう、ある人物に頼んであると言われました。明言はできませんが、この家はマルコの家だった可能性もあります。かなり広い二階の広間のある家を借りて、そこで過越の祝いをする。「**わたしの時**（十字架の死）**が近づいた**」と言えば分かると。

本論３．裏切りの指摘

> **さて、夕方になって、イエスは十二弟子といっしょに食卓に着かれた。みなが食事をしているとき、イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちひとりが、わたしを裏切ります。」すると、弟子たちは非常に悲しんで、「主よ。まさか私のことではないでしょう」とかわるがわるイエスに言った。イエスは答えて言われた。「わたしといっしょに鉢に手を浸した者が、わたしを裏切るのです。確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はわざわいです。そういう人は生まれなかったほうがよかったのです。」すると、イエスを裏切ろうとしていたユダが答えて言った。「先生。まさか私のことではないでしょう。」イエスは彼に、「いや、そうだ」と言われた。**（26:20-25）

過越の食事が始まりました。時は木曜日の夕方６時頃だったと思われます。**奠座**（ござ）が敷かれ、低い長テーブルをコの字型に置き、その外側で足を伸ばし、左肘をつく形で食事がなされました。軽くワインも飲みましたので、皆気分が良くなり、談笑もあったことでしょう。ところが、**宴**（えん）もたけなわという時になって、主イエスが全員の度胆を抜くようなことを言い始めたのです。「あなたがたのうちの一人が、わたしを裏切る」と。主イエスは明らかにユダを意識して言っておられるのですが、驚いたことに、他の弟子たちが次々に「**主よ。まさか私のことではないでしょう**」と問い始めたというのです。この時の 11 人の心境とはどのようなものだったのでしょうか。彼らは主イエスの受難を薄々と予感していたと思われます。しかし、実際にその時が来たとして、自分は果たして主に従い通すことができるだろうか。誰にもその確信がなかったということが明らかにされた。これは私たちに置き換えることもできるでしょう。私たちは自分の命が懸かった状況にあって、主イエスだけを主と告白することができるだろうか。これは、私たちの根性でどうにかなるものではないのです。事実、11 人の弟子たちは、主イエスが捕われた時、誰一人従い抜くことはできませんでした。残念ですが、人間の信念というものはまことに不確かなものなのです。

しかし、11 人の弟子たちとユダとの間には決定的な違いがありました。11 人は自ら

主を裏切ろうとしているのではなく、受難の状況で受動的に逃げ出してしまう。しかし、ユダはそうではない。彼は自分で決断し、自らの意志でもって主を裏切ろうとしているのです。「**先生。まさか私のことではないでしょう**」。このユダの言葉自体は他の弟子たちとほぼ同じです。しかし、どうも彼は 11 人が非常に悲しんで、慌てふためいて問うたのとは違い、自分の心を隠すために同じ言葉を使っている感じがするのです。しかも、他の弟子たちが「主よ」と敬慕（心から尊敬し慕うこと）の呼びかけをしているのに対し、ユダはただ一人「先生」と呼んでいます。このことも、彼の心が既に主イエスから遠く離れていることを物語っているでしょう。

主イエスは「**わたしといっしょに鉢に手を浸した者が、わたしを裏切る**」と答えています。これは漠然とした答えであり、そこに居合わせている全員が「一緒に鉢に手を浸して」いるのですから、誰とでも取れるのです。このように、主は裏切り者をユダと断定はなさらなかった。このところに主の配慮があります。ユダに最後の悔い改めのチャンスを与えたのです。また、同時に 11 人にも自分の不確かな心に気づかせようとしておられたのかもしれません。

ユダの「まさか私では」という白々しい問いに対し、新改訳では主イエスが「いや、そうだ」と答えたと書かれていますが、原文では「あなたは言う」という表現が使われていて、実はそこまで断定されてはいないのです。新共同訳では「それはあなたの言ったことだ」、塚本訳では「いや、そうかも知れない」。「わたしが答えるまでもなく、ユダよ、あなた自身が知っていることではないのか」というニュアンスでしょう。

さて、この後の顛末は、マタイ福音書には書かれていません。むしろ、ヨハネ 13 章に詳しく書かれています。ユダは「**あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい**」（ヨハネ 13:27）と言われ、出て行きました。彼はそれまで、あくまでも善良に振舞ってきたのでしょう。他の弟子たちは彼が慈善のために出て行ったと思っていたのです。これほど固い意志をもって共同体を欺き続けたユダの「強さ」は、ついに「悔い改めない強さ」となって行き着くところまで行ってしまいました。主イエスは最後まで悔い改めのチャンスを与えてくださっていた。ユダは最終的な岐路に立たされていたのです。永遠を分ける決断が迫られていました。

【結論】

この後いよいよ契約のパンと杯が交わされます。弱さをもつ弟子たち、ご自分から離れてしまう弟子たちに、前もって赦しを約束してくださる主イエス。この恵みに留まることこそが信仰なのです。もちろん、この恵みはユダにも与えられようとしていました。

しかし、彼にはその恵みを振り払う「意志の強さ」があった。これは、言い換えるならば、徹底して悔い改めない心です。私たちの内に、神の声を退ける頑なさがないか。むしろ、弱さのある不確かな人間として、主の恵みに依り頼みたいと思うのです。

【祈り】

　主よ、イスカリオテのユダには「強さ」がありました。しかし、その「強さ」は彼を滅びへと導くものでした。聖霊の語りかけに耳を塞ぐ「強さ」でした。主よ、私たちの内に同様の「強さ」、変わりたくないという思いに固執する頑迷さがないかどうか、自らを探ります。私たちの心を柔らかくし、生けるかぎり悔い改めの機会を与えてくださるあなたの恵みに応える者とならせてください。

【祝宣】

仰ぎ願わくは、
聖書のストーリーを「自分の物語」として、読者に読ませ給う、父なる神の愛。
ユダに、最後まで悔い改めの機会を与え給うた、主イエス・キリストの恵み。
自らの頑なな心に気づかせ、神の語りかけに応え得る柔軟さを与え給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。